（昭和37年3月12日
第三種郵便物認可）

令和２年３月10日

（第701号）

国民同胞

発行所
公益社団法人　国民文化研究会
（九州←→東京←→全国）
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替　00170-1-60507
電話　03-5468-6230
ＦＡＸ　03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料　年間2000円

大学生に見る国語力の低下

―英語教育より国語を―

永井鉄郎

大学で隣の大国の言語を教へて二十年になるが、ここ数年の大学生の国語、中でも漢字の知識の低下には驚くばかりである。東洋学者の加地伸行先生が嘗て新聞紙上で「現代の大学生はまるでアラビア語のやうな未知の言語を学ぶ姿勢で中国語に取り組む」と嘆かれてゐたが、正にその思ひを強くする。

現代中国語では簡略化した漢字（簡体字）を用ひる。日本語から類推できぬ字体も確かに存在するが自ら調べれば、或いは調べなくとも考へれば見当は付くのに、彼等はそんな努力はしない。例へば「言偏（ごんべん）」の付く「請」「説」「謝」は簡体字なら「请」「说」「谢」であるが、彼等はその簡体字の由来すら考へずに一字づつ新たな文字として覚えようとする。学習歴二年以上の優秀な学生がある時、「请」と「清」は違ふ字ですか、と言ひ出したのには呆れてしまった。漢字の意味を考へてをらず、彼我の字体の違ひを一文字から他へ応用しようとする意識もないのだ。

簡略化の結果、複数の漢字が同一字体となってしまふことも少なくない（日本で「辨」「辯」「瓣」が全て常用漢字「弁」となった如く）。携帯電話は中国語で「手机」と書かれるが、「机」は「機」の簡体字であって「つくえ」とは無関係だ。しかし大学生は悉くこれを「てづくえ」と思ひ込んでゐる。電話が何故「机」になるか疑問に思ひ調べようとはしない。

それならば教科書の簡体字と共に繁体字（所謂「旧漢字」の意。台湾で華語の表記に用ひられる）を教へようと思ひ立ち、別刷りの教材を自作で用意した。これならば簡体字「谢谢（有難う）」「请问（お尋ねします）」は、繁体字で「謝謝」「請問」となり一目瞭然、字義を意識できる。ところがこれで授業を進めたところ、殆どの大学生は拒絶反応を示す。台湾に親近感を持つ若者は多いし、この方が見た目に分り易いのだから繁体字で勉強したくないか、と尋ねたら首肯したのは一割もをらず、その他は難しいから嫌だと言ふ。簡体字の「药」よりは繁体字の「藥」、同様に「伞」よりは「傘」、「飞机」よりは「飛機（日訳：飛行機）」の方が遙かに親しみ易いはずだが、彼等は「學」「醫」「聲」等の字を見ると辟易してしまふ。かといって簡体字なら間違ひなく書けるといふわけでは決してない。試験の答案では誤字だらけである。「本」を中国語では「书」と言ふが、これは「書」の草書体を活字体にしたものだ。授業でそれを説明しても平気で「弟」「弔」などと書く学生がゐる。近頃の学生は読書などしないから本に対して弔辞を述べたつもりだらうか。

この状態は漢学塾が由来となってゐる我が母校でも、現在教へてゐる他の三つの大学でも学生気質に差異は感じられない。学生時代に教へを請ふた儒学者の宇野精一先生は「新漢字になつたために文字の系統――漢字には必ず系統があるのですが、それがメチャメチャになつてしまつた。（中略）團體の「團」は中に寸を書く、本来は「專」を書いた。自轉車も「轉」なのに今は「転」、傳統の「傳」も「伝」です。これらの文字には一連の發音上の關係があつてさういふ字が出來てゐるのに、片方は「云」になつて片方は「寸」になつてしまつてゐる。また仏（佛）と沸、独（獨）と濁のやうに、整理が不統一のものもあります」（「當用漢字について」・字体仮名遣ひ原文通り）と新字体を批判されてゐた。旧字体を知れば漢字の知識は幾重にも深まるのに、今の大学生は忌避する。

とはいへ現代では高校で古文も漢文も学習しなかったといふ大学生も多いらしい。そのため国文学専攻の学部に於いても古典文法の授業を設けてゐるといふ有様である。

これでは中国語どころか国語使用もおぼつかなくなる。最近の親は子の名付けに使ひたい漢字として「胱」「腥」を挙げるのがゐると言ふ。字面が月や光や星で美しいと思ったからださうだが、これは「膀胱」の「胱」だし、「腥」は「生臭い」「醜い」意味で、「腥聞」とは品行が悪いといふ噂のことだ。これらの部首が「月」ではなく「腸」「肝」「肛」などと同類の「肉月（にくづき）」であることすら知らぬ大人がゐる。碌に漢和辞典を引いたこともないのだらう。

国語力の低下は歴史からの寸断で、延いては国力の衰退にも繋がる。小学校から英語を、などと言ってゐる場合ではない。また、そもそも充分な国語力を持たなければ上述の通り外国語学習など無理なのだ。

（二松學舍大学特任准教授）